

二〇二五年度大学院入試問題 文化交渉学専攻

博士前期課程 試験科目「小論文」(六〇分)

\*以降のページにある問題1、2のうち、一つを選んで解答しなさい。  
\*選んだ問題の番号を解答用紙に明記すること。

文化交渉学

専攻

領域（博士前期/修士・博士後期・前後期共通）

試験科目：第 外国語（ ） / 専門科目（ 小論文 ）

試験時間：（ 60 ）分

① 次の問題文を読んで、以下の各問いに答えなさい。

- 一、著者は問題文の前半において、キーワード「フォルモローサ」の可能性に注目している。「フォルモローサ」がかかる意義を持ちうるのは、この言葉がある歴史的な両義性（相反する二つの特徴を具有すること）を帯びているためにほかならない。この「両義」はそれぞれどのようなことがらを指すか、各一五〇字以内で説明しなさい。
- 二、問題文の末尾に掲げられた沙力浪の詩「雲のなかを歩く」について、著者が傍線部のように考えたのはなぜか。詩に用いられた語句・表現などを手がかりに、三〇〇字程度で説明しなさい。

一六世紀なかば頃、アジアの未知の海域を航行していたポルトガル船の航海士が台湾の島を見て発したという感嘆の声が、私に隠された歴史と記憶と想像力の見えざる糸を喚起する。その船乗りの声は、海上からはじめて望む緑豊かな島の姿に感嘆し、「フォルモローサ！(Formosa)」「なんと美しい！」と叫んでいる。この「フォルモローサ」という言葉のなかには、東アジアに（そしてポルトガルやスペイン、さらにオランダやイギリスを介して世界全体に）到来した大航海時代、そして布教と植民地主義の時代から現在に至るまでの、複雑で回帰的ですがある関係性について思考するための、特別な寓意の力があるように思われる。

それはたしかに西欧による近代世界の「発見」をうながす叫びであり、植民地主義的「領有」の前触れとなる符牒である。美しかったはずの島々は、それゆえに奪取され支配された。その意味で、フォルモローサは、一つの大きいなる幻想でもあった。だが同時に、それはどこかでその後の歴史の顛末を超えてゆく、原初の、いまだ整序されていない混沌とした響きをも宿している。フォルモローサが一つではなく、画一的な意味にも回収されない、群島論的な想像力を開く未知の可能性をはらんでいることが予感されてくる。

振り返ってみると、私はこれまで、ポルトガルやスペインの植民地としてはじまったラテンアメリカやカリブ海への旅や滞在を通じて、このポルトガル語の「フォルモローサ」（スペイン語では「エルモローサ」）の無数の反響をどこかでつねに聞きながら旅し、「世界」について考えてきたように思う。台湾に来る前に、すでに私はさまざまなフォルモローサと出遭っていたのかもしれない。そしていま、私は台湾の生活者の日常感覚にできるだけ近づきつつ「住む」ことを、このフォルモローサの島で試みようとしている。

狭義においても、「フォルモローサ」は、いまやポルトガルによる台湾島の別称としての過去の歴史的な意味論を抜け出し、中華民国、台湾といった政治的な文脈で使用される名辞をより文化的な文脈に開き、そこに、漢民族を中心とした旧来の台湾人のアイデンティティを超える、この数十年のあいだに生まれつつある脱規範的かつ混濁的な国民意識をあらたに語るうとするときに言及される言葉となりはじめた。そして私のさらなる閃きは、「フォルモローサ」という言葉が一種の「呪音」として、世界を既存の地政学や言語地理から解放し、思いがけない接続的な関係性や詩的な飛躍の可能性を発見するための、手がかりともなる概念なのではないか、という直観である。「いくつものフォルモローサ」とは、そんな未知の関係性にみちた世界地図をあらたに見出すためのヴィジョンとなりうる。

一月末のある日、トランスナショナルな視点で文学・文化研究を推進している台中の国立中興大学の「台湾文学・跨国文化研究所」で、台湾原住民プヌン族の作家・詩人、沙力浪の講演があった。沙力浪は一九八一年に花蓮卓溪郷中平に生まれ、一時部族をはなれて都会の

大学で文学や言語学や民族学を学んだあと、そこで得られたより俯瞰的な知の展望をもって、いまは山岳民族である部族の土地をめぐる記憶や伝承を記録し、原住民の言語による書籍を出版する独立書肆を設立し、失われかけたプヌン文化を保存・継承する実践的な活動を行っている注目すべき若きリーダーの一人である。

沙力浪の講演は「雲から降りてきた家族（従雲端走下来的家族）」と題されていた。先頃刊行された、彼の最新著のタイトルでもある。プヌン族をはじめ、台湾の多くの原住民が住んでいた峻険な中央山岳地帯は、一七世紀からの西欧諸国による安平や基隆や淡水などの港の領有に始まり、大陸中国人による入植と支配、さらに近代日本国家による植民地化、戦後やってきた国民党政権による庄政など、長い歴史のなかで、決して自然豊かなサンクチュアリでも秘境でもなかった。壮大な山々もまた、つねに国家的・法的な規範によって囲い込まれた地帯でありつづけ、その影響から自由ではありえなかった。雲上に住んでいたはずの部族たちは、狩猟民や遊牧民であることから次第に国家の管理下に置かれた使役人や兵士へと変貌し、いくつもの抵抗や叛乱のはてに度重なる移住を強いられ、故郷とは彼らにとってふたたび戻ることが不可能な場所となっていた。

沙力浪は講演で、彼のプヌン族の祖先たちがたどった、山から森へ、森から谷へといったる複雑な強制的移動の軌跡を、地図を示しながら克明に語った。一族の家族調査や戸籍の追跡、さらには日本占領下の探検家が残した記録など、あらゆる資料に当たりつつ、「雲から降りてきた家族」の来歴と軌跡とを詳細に再現したのである。さらに彼はそこに、彼自身が祖先の山に再び還り、その自然環境や残された神話伝承などを調査・復元する「現在」のプロセスを重ね合わせ、部族の過去を蘇らせつつそれを今現在の状況と繋ぐという、稀有な実践的探究についても語った。いま彼は、祖先のいた集落にかつてあった伝統的な石積みの家を正確に再建し、それを維持し、山岳ガイドとして外来者にも紹介しながら、過去と未来を結ぶ部族の「生存」をめぐる新しいヴィジョンを模索している。

祖先たちは故郷の山に「戻る」ことができなかった。その若き末裔である沙力浪が、彼の身体と精神の両方をもって、ふたたび祖先の山に「還った」のである。彼のヴィジョンが、決して単なる歴史的な実証でもノスタルジーでもなく、未来に向けた創造的な生の創出の試みであることは疑いない、と私は思った。そのことを、「雲のなかを歩く（漫歩在雲端）」という詩がみごとに示している。

尾根に沿って／三二〇メートルの雲のなかを歩く／襄陽山の頂に立ち／キーボードの上にいるように／一語一語打つてみる／祖先の物語を口述筆記する／長老たちの口から語られる山々／武雙山、西巒大山／塔芬尖山、布拉克桑山／卑南主山、海諾南山／これらを雲のなかに保存する／高齢者が語る物語／玉山の蟹や大蛇／馬博拉斯の最初の黍畑／大分の抗日戦争／それも雲のなかに保存する／わたしは小さなスペースを取っておく／『星の王子様』というフォルダーに入れるため／そこにわたしは一輪の花を保存する／コピーもペーストもできない小さな薔薇の花を「雲のなかを歩く」私訳、文中の「／」は改行を意味する。「後略」

【出典】

今福龍太

2025

「いくつものフォルモサへ（一）／詩人・沙力浪の南への視線とともに」『地平』8

※ 引用に際し、一部表記をあらためたところがある。

文化交流学 専攻

領域 (博士前期/修士・博士後期・前後期共通)

試験科目: 第 外国語 ( ) / 専門科目 (小論文)

試験時間: ( 60 ) 分

②

- 次の文章は、森有正「芥川の作品の仏訳」である。これを読んで、次の問に答えなさい。
- 傍線部①「ヨーロッパ的論理の筋が通っていると称する日本の文章がもつともヨーロッパ語訳しにくいものだ」とはどのようなことか、本文を踏まえて、具体的に説明しなさい。
  - 傍線部②「このことが単に言葉だけの問題ではなく、文化の全般に亘って言われうるのではないか」とはどのようなことか。具体的に例を挙げて、説明しなさい。

フランス語といえば、一番困ったのは、ユネスコ・ガリマール共同出版の『芥川龍之介作品集』の仏訳であった。仕事一年の予定で契約書に署名したのが一九五五年秋であったが、出来上がって出版されたのが六七年の春であった。十年以上経っていた。ユネスコのロジェ・カイヨワ氏、ガリマールのエティアンブル教授には大変御迷惑をお掛けしたがよく待ってくださったものだと思う。

この翻訳を通じて私は実に多くのことを学んだ。またこの十一年は、書き言葉としての私のフランス語が定着して行った過程でもあった。一見したところ芥川の記事は欧文脈をとり入れた明快なものだと思われているが、実際にやってみると決して簡単にそうだったようなものではないということが判って来た。そしてそれは、第一に本当の欧文脈と我々が欧文脈だと思っているものが似てもつかないものだ、ということから来ている。

次に芥川の明晰さというものは論理的性格のものではなく、多分に心理的であり、感傷的できえあって、明晰さへの憧憬ではあっても明晰さそのものではないということからそれは来ている。かれの中には明晰さに対する幾つかの「感傷のしこり」のようなパターンがあって、それが出て来ると筆を投げ出して嘆息せざるをえなかった。著者が得意になっていると推測されるところほどそれはひどかった。精細な叙述らしいところは、くどくどとした心理的説明にすぎないことが多く、叙述でもなんでもなかった。説明は決して叙述ではないということをこの著者は考えてみたことがあったのだろうかと考えた。しかしここでは芥川批判が主眼ではなく、ヨーロッパ的文化を装った、所謂①ヨーロッパ的論理の筋が通っていると称する日本の文章がもつともヨーロッパ語訳しにくいものだということを書いたかったのである。

私の経験では志賀直哉、森鷗外、夏目漱石は文句なく欧文脈にのるものである。古典では「古事記」が訳し易く、「源氏」も原文の難解さは別として、訳そのものは決して不可能ではなく、訳者にその人を得れば、むしろフランス語のもっている新しい可能性を開発しさえするだろうと思われる。

結局、私は六、七回芥川の訳のタイプを打ち直し、フランスの友人にも相談し、最後は、信頼の出来る若いフランスの友人何人かに代わりばんこに来て貰って、訳文をイントネーションを明確にして朗誦風に読んで貰うことにした。私はその間、原書を手しながら読誦を聴き、訳として、あるいは文章としておかしく響くところはその都度訂正するようにした。私はこの最後の方法は成功したと思っている。

おどろいたことは、以上述べたような意味でも訳せないと思ったような変な個所が段々全体と融合して目立たなくなつたことである。そして最後には、これは多分に主観的な要素もある

が、原文と訳文とがそれを読むのを聴いて殆んど同一の印象をあたえるようになることまでこぎつけることができた。それは逐字訳に近いほど意味が近く、同時にそれを読んだり聴いたりした感じがやはり同一であるという点を目指したのである。いずれにしても、これをなしおえて私は翻訳というものはとにかく可能であるという確信を持つことができた。

欧文和訳の方はもっと容易であろうと想像されるかも知れないが、それは我々が日本語で生きているからであつて、本当は前の場合と同じ程度にむづかしいのである。もし今日何千何万と出る邦訳書の十分の一がしかるべき用意と能力によってなされるならば、今日我が国の現代文化や学問の様相は一変するであろうと思われる。

言葉の問題は大切である。今日の日本語には欧文脈が入っているとわれ、日本語も近代化して来たように考えられているが、その日本の欧文調が伝統的な日本語以上に本當の欧文脈から遠いものであるとしたら、これは困つたことである。そして私は<sup>②</sup>このことが単に言葉だけの問題ではなく、文化の全般に亘つて言われうるのではないか、ということ恐れるのである。

文化交渉学

専攻

領域

（博士前期/修士・博士後期・前後期共通）

試験科目：第 外国語（英語） / 専門科目（ ）

試験時間：（ 90 ）分

※次の文章を日本語に訳しなさい。

On a visit to Beirut during the terrible civil war of 1975–1976 a French journalist wrote regretfully of the gutted downtown area that “it had once seemed to belong to . . . the Orient of Chateaubriand and Nerval.” He was right about the place, of course, especially so far as a European was concerned. The Orient was almost a European invention, and had been since antiquity a place of romance, exotic beings, haunting memories and landscapes, remarkable experiences. Now it was disappearing; in a sense it had happened, its time was over. Perhaps it seemed irrelevant that Orientals themselves had something at stake in the process, that even in the time of Chateaubriand and Nerval Orientals had lived there, and that now it was they who were suffering; the main thing for the European visitor was a European representation of the Orient and its contemporary fate, both of which had a privileged communal significance for the journalist and his French readers.

Americans will not feel quite the same about the Orient, which for them is much more likely to be associated very differently with the Far East (China and Japan, mainly). Unlike the Americans, the French and the British—less so the Germans, Russians, Spanish, Portuguese, Italians, and Swiss—have had a long tradition of what I shall be calling *Orientalism*, a way of coming to terms with the Orient that is based on the Orient’s special place in European Western experience. The Orient is not only adjacent to Europe; it is also the place of Europe’s greatest and richest and oldest colonies, the source of its civilizations and languages, its cultural contestant, and one of its deepest and most recurring images of the Other. In addition, the Orient has helped to define Europe (or the West) as its contrasting image, idea, personality, experience. Yet none of this Orient is merely imaginative. The Orient is an integral part of European *material* civilization and culture. Orientalism expresses and represents that part culturally and even ideologically as a mode of discourse with supporting institutions, vocabulary, scholarship, imagery, doctrines, even colonial bureaucracies and colonial styles.

\*Chateaubriand フランスの小説家・政治家 1768-1848

\*Nerval フランスの詩人 1808-1855

(Said, Edward W. *Orientalism*. 1978)

文化交渉学

専攻

領域（博士前期/修士・博士後期・前後期共通）

試験科目：第 外国語（中国語） / 専門科目（ ）

試験時間：（ 90 ）分

次の中国語の文章を読み、下線部①～⑤を分かりやすい日本語に翻訳しなさい。

①历来中国的善会善堂对无业游民大都不予救济，就是因为他们被视为是道德上有缺陷者，因此游民问题在近代以前乃至近代初期基本被官方和士绅等地方精英当作一个伦理道德问题来看待，主要采取排斥与镇压的政策。

由本书第一章论述可知，上海最早处理游民问题的机构是栖流所，不过栖流所仅是临时收留、救济重病待毙之游民，一般之青壮年游民仍然未被列入救济之列。②民国初年的上海普益习艺所与新普育堂开始较多的收容处理各类游民，尤其是对年轻力壮者加以收容、教以工艺，试图使其掌握一技之长，出所后能够自谋生路，不再流浪；但这时是将游民与贫民一体看待，也就是将游民问题当成经济问题、贫穷问题来处理。20世纪20年代上海开始出现专门以游民为救济对象的慈善机构，如游民工厂、淞沪教养院、游民习勤所等。③这个时期，游民既被当成是“社会之蠹”，但时人亦认为游民充斥，也是由于社会现状使然。取缔、安置游民，也就是为了“保持地方公共安宁”。因此部分人开始将游民问题当成治安问题、社会问题看待，积极筹划各种救济、处理游民问题的方案。此后整个民国时期，各种救济、收容游民的机构也基本将游民问题当成社会问题来处理。④但对游民的道德指责也始终没有消除，说他们“秉性恶劣”，是“不良分子”，游民、乞丐是“社会渣滓”，“专事欺诈敛财，甚至铤而走险，流为盗匪，破坏社会安宁秩序，莫此为甚”。同时，上海是“通商巨埠”，在民族主义逐渐兴起以后，尤其是南京国民党政府时期，上海游民充斥还是一个严重有损民族尊严的问题。

⑤在人民政府游民改造政策中，一开始强调游民、乞丐出身于“劳动人民”，他们之所以流落为游民，主要是因为“国民党反动派的罪恶统治而（使之）失去正当的生产、生活条件的结果”。同时也由于“长期受帝国主义、封建势力和官僚资本主义的统治与剥削”。因此收容、改造游民，既是对旧制度、旧社会的否定和清理，同时也是拯救受苦受难同胞的壮举。

阮清华『上海游民改造研究』上海辞书出版社、2009年、231-232頁

文化交渉学 専攻 領域（博士前期/修士・博士後期・前後期共通）

試験科目：第 外国語（ ） / 専門科目（小論文）

試験時間：（ 60 ）分

別紙の文章（灌精一『文人画概論』）を読んで、以下の課題Ⅰ・Ⅱに解答せよ。  
なお、文章読解の際には、適宜に〔注記〕を参照すること。

〔注記〕

\*郭若虚の説くが如く……これより前で筆者は、北宋・郭若虚の「氣韻生動（作者の高い精神性が作品に反映される）」説に言及する。  
\*クロローチエ：B. Croce イタリアの哲学者。  
\*カンディンスキー：W. Kandinsky ロシア出身の画家。ドイツ・フランスで活動した。  
\*『僕之所謂畫者』……私の絵画というものは、気ままに描いたものであり、対象に似ていることは追求せず、ただ自分の楽しみのためだけのものだ、という意味。  
\*『依仁游藝』……仁という徳によりそって、教養としての技芸に遊ぶ、という意。

課題Ⅰ 文中の傍線部「文人畫の原理は合致する」とあるが、なぜ「合致する」といえるのか。  
本文の内容を踏まえながら説明せよ。

課題Ⅱ 芸術作品において、職業的であることと非職業的であることについて、本文の内容を参照しながら自己の考えを述べよ。

郭若虛の説くが如く、人格を本位として所謂ゆる心印の如くに氣韻の現はれのある事がそれであらう。之を今日の言葉に直して云へば、即ち表現 *Expression* を眼目とするのである。要するに文人畫の原理は、近頃西洋に起つた藝術上の表現主義と合致するのである。表現主義は心印主義と云ふも同じである。西洋の表現主義を説くものにも種々あるが、例へばクロアチアが説く所に依れば、藝術の本義は純真なる直感に在るので、純真の直感はその自體が即ち表現である。表現を基本とするが故に、藝術は須らく抒情詩的なるべきもので、それには作家の人格から溢れ出でた誠實性がなければならぬと云ふのである。夫故にその主義は丁度文人畫に常儀まるのである。表現派の畫家として有名なるカンデンスキの唱道する所の内面の音響 (*Inner Klang*) と云ふものゝ如きも、郭若虛の云ふ氣韻と頗る似寄つた所がある。そうして見ると文人畫はその主義の上の於て、頗る近世的なるものであるかの如くに見える。左様に近世的なるものが支那に於て古くから開けてゐたと云ふ事は、寧ろ驚くべき事のやうである。けれども又文人畫の原理が、大體に於て最近の西洋表現藝術の主張と一致するものはあるにしても、文人畫と表現派の藝術とを全く同じものと視る事は出来ない。兩者大體に於て主張を同うするものがあるとは雖も、尙ほその實際に就て詳しく分析して考へて見ると、又大いに異ふ所がないとは云へないので、文人畫は文人畫であつたから特殊の性質を持つてゐる。

文人畫をその最も發達した時のものに就て見ると、それには更に若干の特殊なる條件がある。先づ第一に文人畫はその性質として職業的ならざるを要するもので、即ち作家が人の爲めに畫くと云ふよりも、寧ろ自分自身で樂む境涯に於て畫くと云ふ事がなければならぬ。外からの拘束を受けなくて、自身の樂む境涯をその儘に吐露すると云ふ事がなければならぬ。古の文人高士の技藝は、殊にそうであつたと考へられてゐる。事實に於ては、文人の作る所のもので、時として意外に職業的なるものに近いものもない事はないが、大體から云へば、文人の畫は他人の爲めにするよりも、自分の爲にする點に於て職業的のものとは違はなければならぬ。文人に相應しい文人畫の約束としては、此職業的でない、自ら樂むの境涯を有すると云ふ事が第一に大切である。倪雲林が友人に答ふ

る消息の中に、自分の畫いた陳子樞剡源の圖に就て云ふ所を見ると、その文章の中に

『僕之所謂畫者、不過逸筆草草、不求形似、聊以自娛耳。』

とあるが、丁度それである。既に表現が主義であるならば、自から樂むの境涯に在るのは當然だとも云へるかも知れないが、併しそれが特に職業的でない爲から來るとなると、それには特殊の性質が伴ふのである。近頃の表現派の藝術の如きは如何に主觀的であつても、強いてそれを非職業的のものとするべく要求してはゐない。

文人畫は非職業的なもので、而かも自樂の境涯を有すべきものであるが故に、それは又遊戯的である。その仕事は遊戯三昧に出づるのである。『依仁游藝』と云ふと幾分堅苦しくも聞えるが、所詮その方針を外づれる事はない。遊戯的と云へば眞面目でないものゝ如くにも考へられるが、必しもそうではない。作家が折に觸れて意の欲するまゝに、自分の觀た所のを自家胸臆のものとして率直に畫き現はす場合に於ては、寧ろ甚だ眞面目である。けれども意の欲するまゝに畫き現はして、形式の美に拘泥するものではないからして、その作物には、之のづから素朴性 *Natvity* が伴ふ。而してその素朴性が魯鈍なる爲めから生ずるのではなくして、その裏面に自然を透視したものがあつて、意味のある素朴性である時に於て、それが又諧謔 *Humor* となるのである。それでつまり文人畫にはその素朴性と諧謔とが結び附いて、その畫に何となくほけた趣があるべきで、それがあつて却つて面白いのである。

文化交渉学 専攻 \_\_\_\_\_ 領域（博士前期/修士・博士後期・前後期共通）

試験科目：第 外国語（中国語） / 専門科目（ \_\_\_\_\_ ）

試験時間：（ 90 ）分

次の中国語の文章①・②を分かりやすい日本語に翻訳しなさい。

① 在成都，人们相互间有了冲突，一般不是上法庭，而是到茶馆评理和调解，称之为“吃讲茶”，或“茶馆讲理”，茶馆便成为一个解决纠纷之地。袍哥在“吃讲茶”活动中扮演了重要角色。袍哥经常被请去做调解人，茶馆也用作解决他们内部纠纷之地。一般程序是：冲突双方邀请一位在地方有声望的中人进行调解，双方陈述理由，中人进行裁判，错方付茶钱，并向对方道歉。这说明精英以茶馆作为介入社会的空间，这些茶馆也成为社区的中心。因此茶馆不仅是一个经济中心，而且也促进了社区联系和邻里认同。“吃讲茶”活动能够长期广泛在地方实施，是由于裁判是在公众监视下进行的，调解人试图尽量主持公正，否则其声誉和公信力将受到损害。而且，如果调解不成功，在公众的眼皮底下，暴力事件也难以引发；即使发生暴力冲突，也容易被公众所制止。“吃讲茶”的活动显示了人们对官方权力的不信任，而愿意把自己的命运掌握在自己人手中。这个活动实际上是无视官方的司法权威，当然不会得到政府的支持。

② 其实，这项活动所引发的问题被严重夸大，使其对社会的稳定作用掩而不彰。但是为什么资料中很少有“吃讲茶”成功调解的记录，反而从档案和地方报纸上经常看到由于“吃讲茶”导致更严重的纠纷甚至暴力？合乎逻辑的解释是，成功地在茶馆解决纠纷是一个常态，不成其为新闻，所以从地方报道中我们所看到的都是这个活动所引发的事件。媒体关于“吃讲茶”的报道可能会给读者错误的导向，以为大多数这些活动是失败的。其实，大多数失败的调解，也没有引发暴力行为，经常是重新议定时间，再进行下一轮“讲茶”。我们可以想象，如果一个自发的社会调解不但不能解决问题，反而造成更多的麻烦，怎么可能经久不衰呢？

王笛『茶馆：成都的公共生活和微观世界』社会科学文献出版社、2010年、340-341頁、345頁